

# THE CITY OF YOKOHAMA

歴史を生かしたまちづくり

第8号

平成5(1993)年11月23日発行

## 横濱新聞

企画編集・発行：横浜市・横浜市歴史的資産調査会  
事務局：財団法人はまぎん産業文化振興財団内  
〒220 横浜市西区みなとみらい3-1-1  
TEL.045-225-2171 FAX.045-225-2172



警友病院別館 旧露亜銀行横浜支店 撮影：米山淳一

### 銀行建築—本店三代とともに 中村 實

(財団法人はまぎん産業文化振興財団理事 横浜市歴史的資産調査会調査委員 横浜学連絡会議幹事 横浜市文化振興財団評議員)

江戸は築地の鉄砲洲、現在聖路架病院のある辺りに近代日本の先覚者の一人、福沢諭吉が慶応義塾を創立してから丁度百年を迎えた昭和33年、私はその経済学部で4年生であった。記念式典に臨み、大学院生、大学生全員に代わり祝辞を述べる光栄に浴したが、その数日前、横浜銀行への入行試験を受けていた。学科試験は神奈川大学の大教室、面接は中区住吉町にあった銀行本店の会議室だった。その本店は昭和13年、横浜興信銀行本店として建てられたコリント式列柱の西洋古典主義建築の佳品である。これと隣合わせに昭和10年に建った横浜宝塚劇場(ヨコホウ)のモダンスタイルとは好対照とされていたが、各々取り壊され、今は「関内ホール」になった。その関内大通り側壁面に旧本店の正面玄関の扉がはめ込まれ、由緒も記されている。さて、昭和34年4月1日、桜もはこぼり始めた紅葉が丘の県立音楽堂では横浜銀行入行式が行われていた。

同期入行者約200名一同に代わり、私は入行の決意を表明したが、「明35年秋、本町5丁目の一角に偉容を誇る6階建ての新店が竣工しますが、私共はその建物にふさわしい行員して…」という内容を盛り込んだ。最初の配属先は横浜駅西口の横浜駅

前支店、ここで2年半の勤務の後、昭和36年秋に新本店に移った。以来、これまで32年の間に数年間これを離れたが、ほとんど本店で勤務した。6階建ての本店は本町通りを面し、未だ「関内牧場」とよばれた大戦の被災地跡が目立つ中で、まさに偉容を誇った。1階の営業室には幅41メートルの大壁画が飾られ、来店客は一律に驚いたものだ。横浜発展の歴史を農業、工業、そして貿易といった絵物語に仕立てたのは、当時の横浜国立大学工学部教授の中村順平氏であった。昭和55年秋から今夏まで、私の仕事場は旧第一銀行横浜支店(前横浜銀行本店別館)にあった。横浜に数多かった銀行建物として価値の高いこのビルは、横浜生まれの建築家西村好時の設計で、近年ライトアップや市内観光バスの車内説明などで一躍有名になったが、近々、今少し北側に移築の予定だ。今夏、横浜銀行はみなとみらい21地区に銀行本店としては全国で最も高い28階建てのビルを建設し、移転開店した。奇しくも初代頭取三溪原富太郎生誕125年にあたるこの年に今後百年を見据えたビルの完成をみたことは、まことに意義深い。横浜銀行の一員として、三代の本店に勤務できたことは感慨無量である。

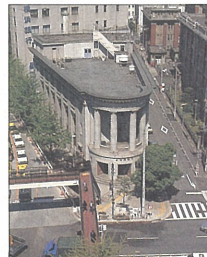
(編集注：横浜興信銀行は昭和32年に横浜銀行と改名)



横浜興信銀行本店(撮影時は中区役所)



関内ホールに残された横浜興信銀行本店の扉



南横浜銀行本店別館 旧第一銀行横浜支店



## ブラフ18番館—横浜山手・暮らしと歴史の資料館が山手イタリア山庭園に開館!



ブラフ18番館全貌

この建物は、大正12(1923)年の関東大震災の直後に山手町45番地に建てられた外国人住宅である。戦後は、現在のカトリック横浜司教区の前身である天主教横浜教区の所有となり、カトリック山手教会の司祭館として平成3年まで使用されていたが、司祭館の建て替えに伴って解体され、部材が横浜市に寄贈された。

建物は木造2階建て、フランス瓦の屋根、暖炉の煙突、ペイウィンドウ、上げ下げ窓と簾戸、玄関ポーチ、南側のバルコニーとサンルーム、中廊下型の平面構成など、震災前の外国人住宅の特徴を残しながら、外壁は震災の経験を生かし、防火を考慮したモルタル吹き付け仕上げとなっている。

これまで、この建物は山手地区では非常に貴重な震災前の洋館であるとされていた。その根拠は、震災直後の横浜の様子を克明に書き記した記録「古き横浜の壊滅」(O.M.プール著)の中に、「山手町45番地R.C.パウデンの住居」としてペイウィンドウをもつ洋館の写真が掲載されており、その特徴が同じ山手町45番地に位置し、カトリック山手教会の司祭館として使用されていたこの建物に一致することによっている。つまり、山手町45番地のパウデン邸は震災の被害を受けて半壊したものの、火災による焼失は免れたため、外壁をモルタル仕上げにするなどの修復がなされて現在に至ったと考えられていたのである。

しかし、この度の解体に伴う調査によって、パウデン邸のものと思われる古い基礎の跡が出土し、写真に写っていたペイウィンドウの位置は、山手本通りに面していなかったことが確認された。そして、倒壊前の外壁仕上げ材である下見板を再建建物の外壁の下地材として再使用したらしいということがわかり、旧司祭館は震災直後の復興建物であるということが明らかになった。

解体部材の寄贈を受けた横浜市は、この建物を旧山手居留地18番地に整備中の山手イタリア山庭園に移築復元し、「ブラフ18番館 横浜山手・暮らしと歴史の資料館」として、今年4月に開館させた。名称のブラフは切り立った崖を意味する英語(Bluff)で、旧居留地に住む外国人が山手の丘をこう呼んだことに因んでいる。山手イタリア山庭園の名称も、かつてこの地にイタリア領事館が建てていたことによる。

ブラフ18番館の1階は、建物の歴史を考慮して大正末期から昭和初期の震災復興期と呼ばれる時期の外国人住宅の様子を再現するため、現在も山手にお住まいのバーナードさんから寄託された家具を展示するとともに、元町で製作されていた当時の横浜家具(横浜新聞第7号ホテルニューグランドの家具たちの欄参照)を復元展示している。2階は、各種の図書やコンピュータ資料検索システム、ビデオなど山手地区の歴史を学ぶことができる現代的な資料館となっている。さらに、新築のホールも備えており、ギャラリーやセミナー、集会などにも使用できる。同館の利用案内は次のようになっている。

### ●ブラフ18番館利用案内

開館時間 9:30~17:00

休館日 毎週月曜日

[月曜日が祝日の場合はその翌日]

祝日の翌日[金曜日が祝日の場合を除く]

年末年始[12月29日~1月3日]

入館料—無料

### ●付属ホール利用案内

内容—小規模な展示会、会議、講演会、研修会など

受付—使用する日の2か月前から受付

時間—9:30~20:30

料金—9:30~12:00 1,000円

13:00~16:30 1,500円

17:30~20:30 2,000円

### ●問い合わせ先

ブラフ18番館 電話番号 045-662-6318

●交通:JR山手町駅より徒歩5分



サンルーム



「山手町45番地 R.C.パウデンの住居」(O.M.プール著 古き横浜の壊滅 より) 資料提供:株式会社有朋堂



リビングルーム(1階)



サロン(1階)



ダイニングルーム(1階)

## キーケン復活!

本紙第5号で紹介した横浜第2地方合同庁舎の第1期工事が完成した。この建物は、総理府・法務省・大蔵省・厚生省・農林水産省・運輸省・労働省の7省庁23官署が入居する全国で最大の地方合同庁舎であり、地上96メートル、23階建ての高層棟とそれを囲む低層棟で構成されている。低層棟部分は、市民から「キーケン」の愛称で親しまれた旧生糸検査所の建物を復元したもので、横浜市認定歴史的建造物である。第1期工事では北翼棟を除いた部分の復元が完了した。

横浜と生糸とのかわりは、安政6(1859)年の横浜開港期にまでさかのぼる。当時から、生糸は我が国の主要な輸出品であり、横浜の都市としての発展の礎を築く動力源にもなった。(本紙第4号掲の特集参照)

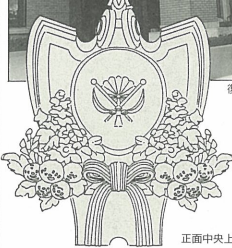
旧生糸検査所は、横浜ゆかりの建築家遠藤才苑の晩年の作品にあたる最後の本格的建築で、いわゆる「遠藤式ルネッサンス」の集大成的作品として大正15(1926)年に竣工。昭和6(1931)年に横浜市の手によって増築され、計画原案どおりのH型プランが完成し、横浜における震災復興建築の中でも屈指の規模と風格、品格を備えた傑作として、江戸末期以来の日本の近代建築の一つの到達点といえる高い評価をうけることとなった。

新合同庁舎建設に際しては、旧建物の耐震構造上の問題から全面建て替えによる復元となったが、解体時には既に消失していた遠藤式ルネッサンスの特徴を示す要素の一つである柱頭飾りも、この度の復元作業によって往時の姿に再現された。

## 横浜第2地方合同庁舎(前横浜農林水産省合同庁舎/旧生糸検査所)第1期工事完成



復元された正面玄関と柱頭飾り



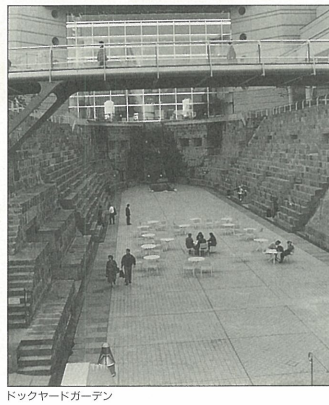
正面中央上部植飾

## 新旧の大建造物の競演! 横浜ランドマークタワー/ドックヤードガーデンがオープン

工である。平成元年4月には横浜市認定歴史的建造物となった。

本紙第2号で詳報した旧横浜船渠第2号ドックの保全活用が、横浜ランドマークタワーのドックヤードガーデンとして実現し、横浜の新しい名所として人気を集めている。

2号ドックは、現存する商船用ドックとしては我が国で最も古いもので、明治29(1896)年の竣



ドックヤードガーデン

2号ドックに隣接する旧横浜船渠第1号ドックは、帆船日本丸の係留場所として本来の用途と機能のまま保全活用されている。これに対して、ドックヤードガーデンとして活用されている2号ドックには、人々が集う場所としての全く新しい用途と機能が与えられたことになる。この対照的な二つのドックの保全活用は、凍結的な保存だけではなく、柔軟な保全活用を目指すという横浜の歴史的建造物保全活用施策の象徴ともいえよう。

また、最先端の大規模建造物であるランドマークタワーと歴史的な大規模建造物である2号ドックが作り出す空間的な競演も対比的で興味深い。みなとみらい21という新しいまちづくりに歴史的建造物が巧みに融合し、その魅力を高めている。都市の発展は歴史の積み重ねがあつてこそ興行きの深いものとなるのである。

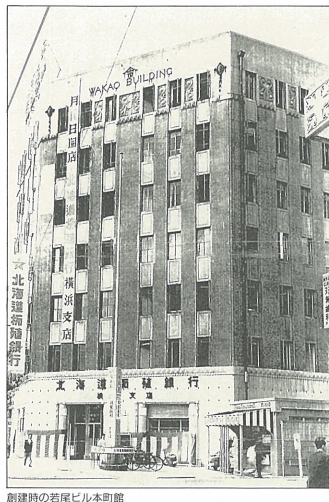


2号ドック時代の備品も活用されている

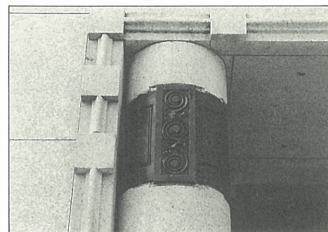
## 旧建物の部材とモチーフの継承をテーマに新しいデザインを試みた新若尾ビル

中区本町4丁目の交差点に建つ一見地味な建物であった若尾ビル本町館は、昭和初期の横浜に多くの作品を残した川崎鉄三の大正14(1925)年の作品で、彼が後に志向したモダニズムの片鱗を示すシンプルな、当時としては高層の建物であった。この若尾ビル本町館が老朽化等の理由から建て直され、その部材とデザインモチーフを継承した新若尾ビルとして生まれ変わった。

建て替えの計画時には既に旧建物のファサード上部の装飾は消失しており、残されていた1階の本石仕上げ部分の石材と装飾、金属の柱飾りや石止め金具を部材として保存して再使用するとともに、玄関回りのデザインを新しいビルのデザインに取り入れる方向で設計が進められた。結果的には、石止め金具は再使用に耐えなかったために復元されることになったが、本石の柱や装飾と金属製の柱飾りは新しいビルに生かされ、金属装飾をもつ円柱が印象的な玄関回りの意匠は、新しいビルのファサードのモチーフとして1階部分に連続して用いられることとなった。

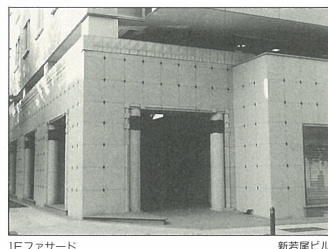


副建時の若尾ビル本町館



柱飾り

新若尾ビル



1Fファサード

新若尾ビル



## 地域に溶け込んだ 瀬谷区長屋門公園 歴史体験ゾーン

瀬谷区阿久和町に長屋門公園がオープンしたのは平成4年7月のこと。オープンからこれまでの約1年半の間に数々の催しが同公園歴史体験ゾーンの運営委員会の手によって開催され、今ではすっかり地域に溶け込んだ様子である。囲炉裏ではげる薪の音、ヘツツイで炊かれる飯の香、煙で少し煙った空気、水音と野鳥のさえずり、ここには過ぎ去った時間がそのまま流れている。これも同委員会の方々の努力の賜物であろう。

長屋門公園という名称の由来ともなっている旧大岡家長屋門は、明治17(1884)年築で昔からこの地域の人々に親しまれてきたもの。残念なことにその敷地にあったはずの主屋(しゅおく)は、横浜市が公園の計画を進めるときには既に消失していた。公園の整備にあたっては、主屋と長屋門、そして、その間の庭という空間がつくりだす古民家の形態をセットで再現しようという試みとなされ、泉区和泉町から江戸時代中期の築と思われる旧安西家の主屋が移築された。

長屋門公園については、機会を改めて詳細に紹介する予定である。

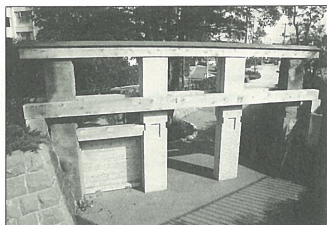


旧安西家主屋

## 姫小島水門の 復元が完了

金沢区の姫小島水門については、本紙第7号でその仕組みや歴史を紹介したが、横浜市によって進められていた復元作業も終了し、走川プロムナードのゲート・モニュメントとして昔を忍ばせる姿を現した。新たに補作された石柱や木製の扉などは、あえて古く見せる処理をせず、古い石柱との対比を明確に示すことで新旧の部材が容易に判別できるように復元されている。

かつて地域の財産として大切に扱われてきた姫小島水門は、親子連れや子供達の姿が行き交うプロムナードの門として蘇り、今でも地域の財産であることに変わりはないようである。



復元された姫小島水門

## 綜通横浜ビルと 横浜プリンスホテル 貴賓館を認定

認定歴史的建造物は合計16件に

横浜市は、歴史を生かしたまちづくり要綱に基づく認定歴史的建造物として、今年新たに綜通横浜ビルと横浜プリンスホテル貴賓館の2棟を追加した。これにより認定歴史的建造物は合計16件となった。

綜通横浜ビルは、日本町旭ビルのファサードを保全活用して新たに建設される建物で、平成7年の竣工予定。この新ビル建設計画で解体された日本町旭ビルは昭和5(1930)年築。本町遊を挟んで横浜市開港記念会館の向かいに位置し、鉄筋コンクリート造の表面にタイルを張った典型的な昭和初期のオフィスビルである。F.L.ライトの影響を感じさせるテラコッタ(装飾タイル)がファサードのデコラティブな印象を強め、建物全体の表情を魅力的にしている。この日本町旭ビルの解体に際しては、ファサードのタイルを一枚一枚すべ



横浜プリンスホテル貴賓館



綜通横浜ビル完成予想図

石橋邸

藤本家住宅旧主屋

て打診し、その結果によって保存する部材を確定したうえで、新築する綜通横浜ビルにおける保存部材の活用とファサード復元の方向が検討された。

横浜プリンスホテル貴賓館は、旧東伏見宮邦英伯爵の別邸として昭和12(1937)年に竣工。戦前の横浜の別荘建築の代表といえる建物で、外観は日本の伝統的な楼閣建築を思わせるが、鉄筋コンクリート造で内部は全くの洋風となっている。

●ここで、今まで紹介していない認定歴史的建造物について簡単に触れておくことにする。

石橋邸は、昭和初期築の木造2階建ての洋館である。玄関ポーチ、暖炉の煙突、中廊下型プラン、細部の意匠に洋館の特徴を備えているが、全体的にコンパクトにまとまり、現代住宅への移行期の予兆を示している。

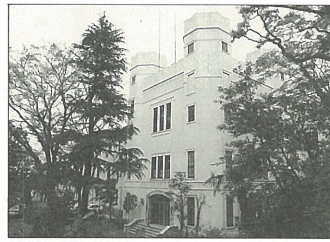
藤本家住宅旧主屋は、江戸時代末期から明治時代初期に南関東で成立した整型四ツ間取りで、大黒柱や差し鴨居などの典型的な技法を備えた古民家である。

関東学院中学校は、山手聖公会と同じく、横浜ゆかりの外国人建築家J.H.モーガンの作品で、中世ノルマン様式の近代建築である。近代学校教育の歴史を語る戦前のミッションスクール系の学校建築として貴重で、希少性が高い。

ホテルニューグランド旧館は、ベース・ロビー・客室の特徴ある3層構成と高密度なインテリアにより建築史的な価値が非常に高い。外観・内部ともに往時の姿をとどめ、現存唯一のクラシックシティホテルとして横浜を代表する建物である。また、昭和史の舞台としての役割も大きく、政治史・文化史的意義も見いだせる。外観だけでなく、玄関・ロビー・ホール・宴会場など内部についても認定した最初の事例となった。

### 横浜市認定歴史的建造物一覧

名 称	所在地	竣工年等	認定年
1 日本火災横浜ビル	中区弁天通5-70	竣工:1926(大正11)年 改修:1986(平成1)年	1989
2 横浜指路教会	中区尾上町6-85	竣工:1926(大正15)年	1989
3 カトリック山手教会聖堂	中区山手町44	竣工:1933(昭和8)年	1989
4 旧横浜船渠架設号ドック	西区みなとみらい2-2	竣工:1896(明治29)年	1989
5 横浜海岸教会	中区日本大通9-1	竣工:1933(昭和8)年	1989
6 横浜山手聖公会	中区山手町235	竣工:1931(昭和6)年	1990
7 岩田健夫邸	中区柏葉	竣工:1912(大正1)年	1990
8 横浜築2地方合同庁舎(旧生糸検査所)	中区北仲通5-57	竣工:1926(大正15)年 復元:1993(平成5)年	1990
9 山手214番館(旧スウェーデン領事館)	中区山手町214	竣工:昭和初期	1990
10 澤野家長屋門	鶴見区馬場2	竣工:江戸時代末期(安政年間)	1991
11 石橋邸	中区山手町	竣工:昭和初期	1991
12 藤本家住宅旧主屋	鶴見区馬場2	竣工:江戸時代末期～明治初期	1992
13 関東学院中学校	南区三春台4	竣工:1929(昭和4)年	1992
14 ホテルニューグランド旧館	中区山下町10	竣工:1927(昭和2)年	1992
15 綜通横浜ビル(日本町旭ビル)	中区本町1-3	竣工:1916(昭和5)年 改修:1995(平成7)年 予定	1993
16 横浜プリンスホテル貴賓館(旧東伏見宮邦英伯爵別邸)	磯子区磯子3-1	竣工:1937(昭和12)年	1993



関東学院中学校



ホテルニューグランド旧館内部

## 『歴史を生かしたまちづくり要綱』が改正される

横浜市は施行から5年が経過したことから 歴史を生かしたまちづくり要綱の見直し作業を進めていたが、助成金限度額を改定するなどの要綱改正手続きが終了し、既に平成5年度から新内容で運用されている。

今回の改正によって社会情勢の変化への対応の幅が広がったことで、横浜市では歴史的建造物の所有者の実情に合わせた、より一層効果的な運用を推進していきたいとしている。

要綱の主な改正内容は次の2点である。

- ①調査設計で1項目であった助成項目を調査と設計の2項目に分離し、それぞれに助成できるようにした。
- ②外観保全工事と維持管理の助成限度額を引き上げた。

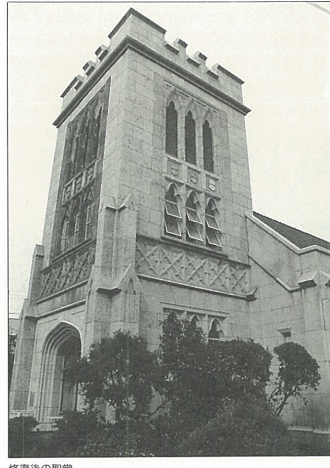
なお、要綱についての詳細は都市デザイン室にお問い合わせいただきたい。

●問い合わせ先  
横浜市 都市計画局 計画指導部 都市デザイン室  
〒231 横浜市中区港町1-1 電話 045 (671) 3850

## 横浜山手聖公会聖堂 の修復工事完了 ライトアップも計画

教会側の長年にわたる努力の結果実現した横浜山手聖公会聖堂の保全改修工事がほぼ完了した。全面大石張りこの建物の修復作業については、宇都宮市大谷町の大谷石材協同組合が一手に引き受けた。作業にあたった職人さんたちもこのタイプの歴史的建造物の修復は初めてのことで、作業には緊張感と熱気がみなぎっていた。今回の修復工事によって玄関前に取り付けられていた屋根も外され、往時の聖堂の姿が蘇った。

この工事にあわせて聖堂のライトアップも計画されている。ライトアップのための照明実験には、教会関係者だけでなく、周辺の住民も参加して照明の当て方や色などについて意見を交換した。修復成った聖堂が星空のもと美しく照らし出される日も近いことだろう。



修復後の聖堂

## 他都市の事例紹介 仮称千葉市立美術館・中央区役所新築工事 旧川崎銀行千葉支店の保全活用

平成4年4月から政令指定都市となった千葉市は、仮称千葉市立美術館と中央区役所からなる複合用途の建物を建設している。この計画のなかで、旧川崎銀行千葉支店という歴史的建造物が大胆な方法で保全活用されようとしている。

旧川崎銀行千葉支店は昭和2(1927)年の竣工。近年は千葉市の施設として使用されていた。政令市への移行に伴う施設の充実のため、千葉市では美術館と区役所の建設用地をこの敷地に求めることになり、建物の保全活用の方法が検討されることになった。

川崎銀行といえば、日本火災横浜ビルも川崎銀行の横浜支店であった。そうした関係もあって、早い段階から横浜市は、この建物の保全活用方法について検討している東京大学大谷研究室からの相談を受けていた。

日本火災横浜ビル方式やイメージ保存方式など、幾多の方法が検討された結果、新しいビルの中にこの建物を取り込むという暫定方式が選択された。このため、新しいビルの基礎工事に際して一度建物をずらし、再度元の位置に戻すという2度の曳家工事が行われた。

この旧川崎銀行千葉支店の建物は、市民ギャラリーなどに活用される予定である。



曳家される旧川崎銀行千葉支店



完成予想図

## 横浜開港資料館企画展示情報 横浜と上海 二つの開港都市の近代

横浜と上海は、19世紀中頃の開港によって近代の幕開けを迎え、外国人居留地(居留地と租界)が形成され、それが起点となって都市発展をとげてきたという共通の歴史的背景をもっている。しかし、横浜と上海では、開港以前の歴史的背景や西洋諸国との条約締結の際の状況の違いなどから、その後の都市形成に大きな相違が生じている。この企画展示では、開港から1920年代までの両都市の歩みを、比較と関係の視点でとらえようとしている。

- 開催期間 1993年10月30日(土)～1994年2月6日(日)
- 開催時間 9:30～17:00(入館は16:30まで)
- 入館料 大人200円、小中学生100円
- 休館日 月曜日、祝日の翌日(1月16日は開館)、年末・年始(12月28日～1月4日)
- 問い合わせ 横浜開港資料館  
横浜市中区日本大通3電話045(201)2100

## 横浜市の歴史的資産調査会事務局からのお知らせ

● 横浜市の歴史的資産調査会の事務局が変わりました。新しい事務局は次のとおりです。

所在地 横浜西区みなとみらい3-1-1 (T220)  
財団法人はまぎん産業文化振興財団 内  
電話: 045(225)2171 FAX: 045(225)2172

● なお、歴史を生かしたまちづくりに関するお問い合わせは、今までと同様に下記窓口にお問い合わせください。

【問い合わせ先】  
横浜市都市計画局都市デザイン室  
横浜市中区港町1-1 (T231)  
電話 045(671)3850 FAX.045(663)3415



# 日本の近代化を支えた横浜の銀行建築

横浜は開港以来日本の近代化の中心地として発展してきた。関内地区にはそうした事実を裏付けるように、明治・大正・昭和という三つの時代を通して多数の銀行が立地し、今でもその多岐「保全活用されて歴史的景観を形成する中心的役割を果している。

銀行の建物は、安全性・安定性・信頼感・安心感など金融機関として基本的な条件を体現するため、堅牢な金庫室や大きな吹き抜けの営業室、堂々とした外観といった意匠や構造上の特徴をもち、いわゆる「銀行建築」として一つのジャンルを形成している。この特徴は、歴史的建造物としての銀行建築に顕著に見られるのだが、現在の銀行建築にも受け継がれている。

## 関内地区に残されている主な銀行建築等



### 横浜正金銀行本店

現：神奈川県立博物館 ★：国指定重要文化財  
所在地—中区南仲通 5-60 施工者—直営  
構造概要—石3、B1 建設時期—M37.7  
設計者—妻木頼黄

●昭和44年に国の重要文化財に指定されたわが国の古典主義様式建築の傑作。明治37年の建築である。震災でドームをなくしたが、昭和42年に復元



### 露亜銀行横浜支店

現：警友病院別館 設計者—B.M.ウォード  
所在地—中区山下町51-2 施工者—  
構造概要—RC3 建設時期—T.10頃



### 川崎銀行横浜支店

現：日本火災横浜ビル  
所在地—中区弁天通 5-70  
構造概要—SRC9  
設計者—日建設計(旧建物は矢部又吉)  
施工者—熊谷組など(旧建物は矢部工業所)  
建設時期—H.1(旧建物はT.11)



### 十五銀行横浜支店

現：神奈川新聞社本館  
所在地—中区太田町 2-23 施工者—清水組  
構造概要—RC4 建設時期—T.11.10  
設計者—清水組

して県立博物館となる。

当初は横浜正金銀行の本店。日本銀行と並ぶわが国の最重要金融機関であった。今日も当時の金庫室が地下に残されているが、全く頑丈につくられている。

設計は明治建築界の巨頭の1人で、官庁營繕を牛耳った妻木頼黄。結局、彼の代表作となる。ルスティカ積み目の地下階に、コリント式大オーダーのピラスター、それに大きな三角ペディメントにドームといった賑やかな構成となっている。凹凸も激しく、彫りも深く、まことに力強いダイナミックな造形である。5年間の工期を要した本格的な石造建築。

石の一つ一つが石彫の作品として存在し、全体は、その個々の石彫作品のアンサンブルとなる。石張りの建築には見られない深さを持ち、擬石仕上げには望むべくもない鋭さをもつ。何はともあれ、横浜で唯一の石造建築なのである。

●当初は露亜銀行横浜支店。ロシアとフランスが資本参加した銀行で、1896年創立の露清銀行と北方銀行(Banque du Nord)とが1910年に合併してできた銀行。いまでは、そうした外国資本の銀行の横浜で唯一の遺構である。

震災前の建物であることは確かで、大正10年頃の創建ではないかと見られている。鉄筋コンクリート造による古典主義様式建築の最初期の例としても貴重。入口や窓の三角ペディメント、イオニア式の大オーダー、半円アーチ窓のキーストーン、それに内部の階段の手すり子など、すべてが大きく造形されており、まことにバロック的な大柄な表現を示す。

●当初は川崎銀行横浜支店で、大正11年の竣工。設計は横浜生まれでドイツに学んだ建築家、矢部又吉。川崎銀行の本・支店の設計を数多く手がけている。

その建物が取りこわされる運命にあった昭和61年の春から3年、多くの人の知恵と努力と、とりわけ施主の英断により、今日見るような新しいビルが平成元年春にできあがった。すなわち、通りに面した二つのファサードのうち、一つはほぼ全面、もう一つはその一部が復元保存されている。総ガラス張りの高層ビルの腰部にルスティカ積み目の石のスカートをはかせたような格好となっている。

当初の建物は、一見全くのクラシックだが、隣の県立博物館と比べれば窓の占める面積が大きいし、窓と窓の間の壁には新しい造形の装飾も施されていて、ルスティカ積みにも拘らず、やや軽い感じがした。しかし、こうして外壁が残され、上部のガラス面と比べると、やはりいかにも重厚。歴史性を感じさせる。

この建物は、歴史的建築物の保存・再生の一手法を提示した先駆的作品であり、様々な賞が与えられ、横浜市の歴史的建造物認定の第1号でもある。しかし、また一面から見れば、積極的に本格的な歴史様式引用を行ったポストモダン建築への誘いをも示す建物でもあり、様々な意味で興味深い建築となっている。



旧十五銀行営業室

●当初は十五銀行横浜支店。昭和32年から現名称。平坦なファサードをもつ地味な建物だが、古典主義の様式建築を基調とし、玄関入口のまわりにはセッションの造形も見られる震災前の希少な遺構。



旧第一銀行営業室

### 第一銀行横浜支店

前：横浜銀行本店別館

所在地—中区本町 5-46  
構造概要—RC3  
設計者—西村好時  
施工者—清水組  
建設時期—S.4

●本町通りと北仲通りが鋭角的に交わるコーナーに、銅鑼のような形のプランで立っている。角の部分は、さしたる機能を持たない半円プランの神殿もしくは祠のような表現となっており、ランドマークとしての役目を十二分に果たしている。当初は第一銀行の横浜支店で、昭和4年の竣工。日本債券信用銀行横浜支店を経て、昭和47年より

現名称。ついでながら横浜銀行本店は昭和35年の創建になる。

設計は、全国の第一銀行各支店を設計した銀行建築のスペシャリスト、西村好時。第一銀行建築課長でもあり、「銀行建築」という本も出している。

最大の特徴は、先述の半円形プランのコーナー。この部分、2・3階は吹き抜けのバルコニーとなっている。バルコニーのアーキトレーブを支えるのが4本のトスカナ式円柱。そしてコーンが半円から左右へと流れるように広がって行く。まことによく出来た古典主義様式の銀行建築である。

内部もまた、同時期の本町通りの銀行建築に比べて、最もクラシックな意匠を配しているが、その当初の姿をよくとどめている。



### 安田銀行横浜支店

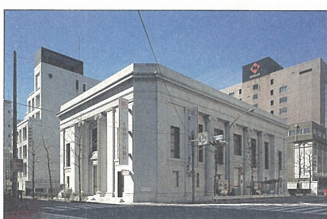
現：富士銀行横浜支店

所在地—中区本町 4-46  
構造概要—RC2  
設計者—安田銀行營繕課  
施工者—大倉土木  
建設時期—S.4.10

●昭和4年、安田銀行横浜支店として創建。富士銀行と改称されるのは昭和23年のことで、昭和29年に南側へ増築が行われている。

設計は安田銀行營繕課。大正末から昭和初期にかけて、ほぼ同じスタイルで同銀行支店が各地に建てられたが、そのうちの一つ。しかし、その中では最大規模であり、また希少な現存例でもある。

外観の最大の特徴が、ルスティカ積み目の外壁。その粗い石積みの中にトスカナ式オーダーの付柱と半円形窓が組み合わされて配される。基準設計に基づいた手なれたデザインと言うべきだろうが、バラツク建築を想起させて貴重。



### 三井銀行横浜支店

現：さくら銀行横浜支店

所在地—中区本町 2-20  
構造概要—SRC2  
設計者—トロウブリッジ&リビングストーン建築事務所  
施工者—清水組  
建設時期—S.6.3

●三井銀行横浜支店として昭和6年に竣工。設計は当時のアメリカの名門事務所、トロウブリッジ&リビングストーン建築事務所である。三井本館設計のすぐ後の作品で、言わば三井本館の縮小版。細部は現寸大の模型がアメリカから送られて来たという。

正面の4本のイオニア式の円柱がその最大の特徴。これはオーダーに則ったみことなディテールを有している。内部にもまた、コリント式の柱頭を持つ柱列が見られ、クラシックな雰囲気も保たれている。横浜の昭和初期銀行建築を代表する作品。



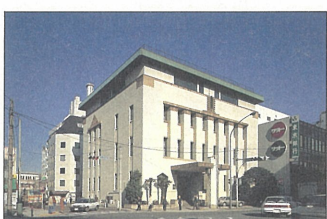
### 第百銀行横浜支店

現：三菱銀行横浜支店

所在地—中区本町 4-41  
構造概要—RC2  
設計者—矢部又吉  
施工者—戸田組  
建設時期—S.9

●第百銀行横浜支店として昭和9年に建てられた。横浜生まれで、横浜に多くの作品を建てた矢部又吉の華麗な銀行建築の遺構である。

三井銀行横浜支店と同じイオニア式の大オーダーを用いる。ディテールの厳しさにおいてははやや譲るとは言え、より華やかな意匠を備えた作品である。内外ともよく当初の姿をとどめ、またその立地の重要さも相まって貴重なモニュメントである。



### 横浜銀行集会所

現：横浜銀行協会

所在地—中区本町 3-28  
構造概要—RC4  
設計者—林豪蔵  
施工者—清水組  
建設時期—S.11.7

●昭和11年、横浜銀行集会所として建てられた。現名称となるのは昭和28年。設計は横浜高等工業の教授であった林豪蔵。

ファサードのデザインが巧み。すなわち3階分を通した7本の柱形の左側3本分の下にポーチが設けられる。ポーチは水平の底を1本の支柱で支える斬新なもの。ポーチの傍の六角形の窓も新鮮。フランスのアル・デコの影響か、あるいはライトの影響もあるだろうか。また、柱形の頂部、その上の底やポーチ底の端部、上部壁の中央および左右端、そして側面の窓上部に配されたテラコッタの装飾が秀逸。まことにシックなデザインである。4階は昭和40年の増築。